

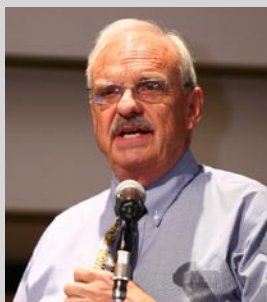
INTERVIEW

教育がつくる持続可能な未来

—1992年の「アジェンダ21」から「国連ESD※の10年」を超えて

チャールズ・ホプキンス氏 持続可能性に向けた教師教育の刷新ユネスコ・チェア、カナダ・ヨーク大学教授

2009年12月11日から12日にACCUが開催した「EFA振興のためのNFE(Non-Formal Education: ノンフォーマル教育)政策プログラム専門家会議」にリソースパーソンとして参加していただいたチャールズ・ホプキンス氏に、「国連ESD10年」をめぐる動きと今後の展望についてお話を伺った。



Charles Hopkins

ESDを推進する世界的リーダーであるチャールズ・ホプキンス氏は、1992年、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された地球サミット（環境と開発に関する国連会議）で採択された「アジェンダ21」の36条「教育、啓蒙、研修」の執筆を行ったことでも知られています。世界各地を飛び回り、ESDの普及と推進のメッセンジャーとして活躍しています。

—チャールズ・ホプキンスさんは、8月の「アジア太平洋ESD教育者フォーラム」と、今回「EFA（万人のための教育）達成のためのノンフォーマル教育政策・プログラム専門家会議」と、2009年に2回のACCU主催会議に参加していただきました。

EFAの専門家とESDの専門家はなかなか会う機会がないので、こういう面白い組み合わせの参加者をよくぞ集められたと感心しています。今回は、EFA分野での専門家たちと有意義な議論をすることができました。

—アジェンダ21の36条を執筆された1992年当時と現在を比べて、状況は良くなっているでしょうか。

良くなった事といえば、例えば、未就学児の数が1億人以上から、7500万人に減ったことが上げられます。オゾンホールが小さくなったのも、良くなったことでしょう。気候変動の問題を含め持続可能性（sustainability）についての認識が広まったのはプラスですが、もちろん十分ではありません。

一方で、砂漠は広がり、森林は伐採され、社会の格差は広がっています。魚の種が多く失われました。そして、多くの言語も絶滅しました。世界は、1992年に望んだような方向転換をできずにいます。

—2005年に始まった「国連ESDの10年」が始まってから、最も重要な変化は何でしょう。

「国連ESDの10年」が2002年のヨハネスブルグ・サミットで提案され、同年の国連総会で決定し、実現したこと、それ自体が大きな達成であると言えるでしょう。アジェンダ36には、40もの重要項目が謳われていますが、国連の10年に取り上げられたのは、ESDだけです。

もう一つは、「国連ESDの10年」の中間年の2009年、ボンで世界会議が開かれ、「ボン宣言」を採択したことです。私は、起草委員会の委員長を務めました。会議には約150カ国から900名が参加し、その中には、大臣クラスが約50人含まれており、ESDへの理解を深めました。「ボン宣言」では、「国連ESDの10年」の後半に必要とされる行動を列記し、その後も、ESDが引き続き実施されなければならないことを謳いました。

—中間年を迎えて、やっとESD実践の形が見えてきたところだという感じがします。ESD促進のために、教育界を善き込んでいくには、どのような効果的な方法があるのでしょうか。

まず、ESDとは、〇〇教育の一種類だという誤解を解かねばなりません。私は州の教育長をしていたことがあります。〇〇教育を学校に取り入れてほしいという陳情を常に受けていました。列記してみると、環境教育、人口教育、開発教育、エネルギー教育、HIV/AIDS教育、市民教育、メディア教育、消費者教育等々、私のリストは、80を超える形容詞形の〇〇教育でいっぱいです。ESDがそのリストに加わるのではないのです。全ての教育と学びが持続可能性に貢献しなければならないのです。

学校教育でESDに熱心なところは、まず、学校全体での取り組みを行うでしょう。いわゆる「ホールスクール whole school」のアプローチです。こういうところでは、科目横断的にESDに取り組み、課外活動も充実しています。それは素晴らしいことですし、実現するためには、かなりのハードルを越えなければならない大変なことです。しかしながら、実はそれだけでは、十分ではありません。

さらに進んで「ホールスクールシステム whole school system」のアプローチが必要です。ここでは、校舎の設計から建築部材の調達、給食の食材、教師・事務員の雇用など、学校に関わる全ての仕組みが、ESDで実現したい方向性と一致していることが求められます。

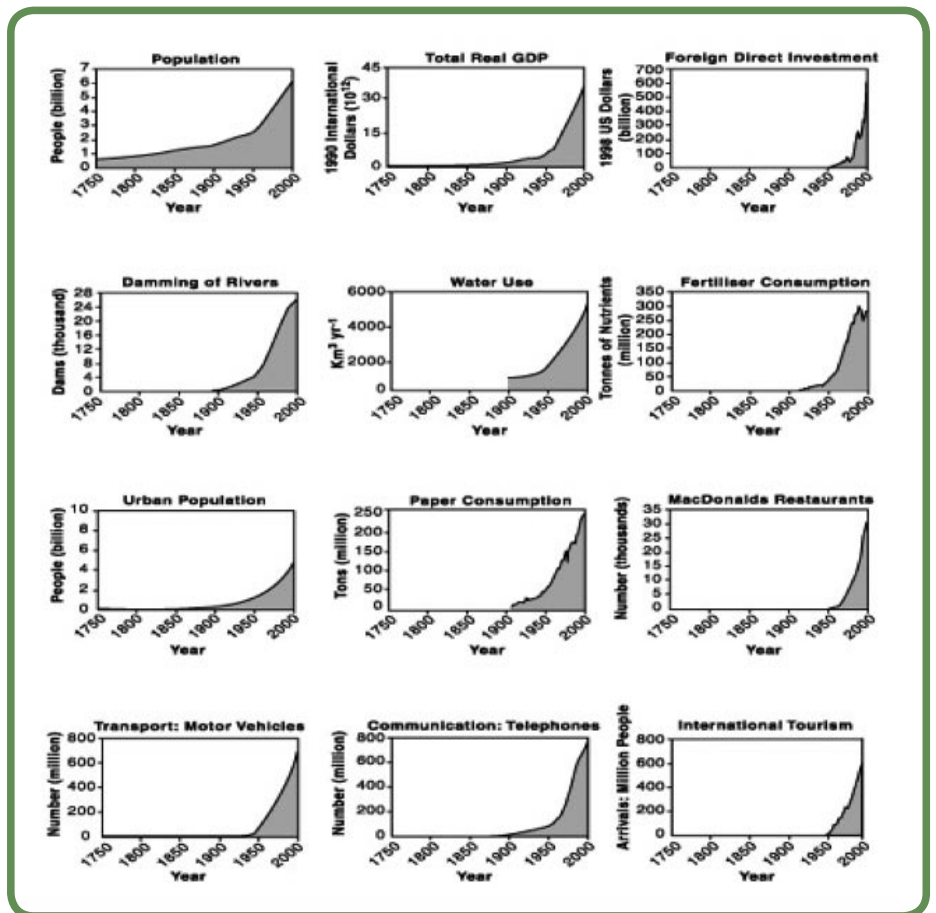
私がかかわっているカナダ・オンタリオ州の

※ Education for Sustainable Developmentの略称。持続可能な開発のための教育・持続発展教育。

例では、教育省と学校運営に関わる幹部職員、それに私の大学の教育学部が参加する二日半の研修で、違う立場から意見交換をし、将来の行動計画を練り、現実反映していく合意をつくることで、成果をあげています。

主要科目の教科研究の学会、特に算数・数学と国語はどこでもありますから、そこにESD的な要素を入れていけるようにすることも、戦略的に効果があると思います。

ノンフォーマル教育は、コミュニティの中で行われ、コミュニティというものはもともと包括的なものですから、よりESDが行いやすいとも言えます。ESDのために、学校とコミュニティが連携していくという姿が考えられます。



20世紀の変化

都市人口、GDP総計、紙や水の消費量、国際観光、マクドナルド店舗数など、20世紀後半がいかに変化の大きな時期だったかが想起される。(出典Steffen et al. 2004)。

一 国際的な動きでは？

ユネスコの枠組みで、持続可能性のための教師教育の新たな方向づけのためのガイドラインと提言を、世界の約30の教師教育機関からなる国際ネットワークでまとめたのが、2005年です。残念ながら、その際には、日本からの参加は全くありませんでした。現在、前回の成果に基づいて、新しくより大きなネットワークを作って活動をしていく予定です。世界には学校教育だけで約6千万人の教師がいると言われ、世界の変革にとっての大きい力です。日本からの参加を大いに期待します。

一 2014年に「国連ESDの10年」が終わるとき、どんなことを期待しますか？

リオの環境サミットでアジェンダ21を議論した1992年には、私たちの問いは「持続可能な未来への探求にESDはどのような役割を果たせるのか」でした。2014年、国連ESDの10年が終わる時には、「持続可能な未来への探求が、教育にどのように貢献するのか」に変化してほしいと思っています。どういうことか説明しましょう。

ドイツのESD世界会議で、ボン宣言を取りまとめる会議の席上で、アジアのあ

る国の教育大臣が「nobility 気高さ」という文言を宣言に入れてくれと提案したのです。誰もその意味がわからなかったもので、休憩時間に彼に聞いてみました。すると、彼の意図はこうでした。「かつて気高い職業だと思われていた教師が、今、尊敬を失いつつある、また、教師自身、変化の激しい社会にあって自信を無くしている。教師たちが、人類の持続可能な未来のために働いているのだという誇りを取り戻し、周囲もその職業に対して信頼と尊敬を示すようになってほしいのだ」と。私も同感です。教師が毎年毎年子どもたちに $4 \div 2 = 2$ と機械的に教えるだけだったら、教師は十分な尊敬に値しないとわれかねません。社会全体が、持続可能な未来に向かって動く中で、重要な分野として教育が認められ、教師も教育も、社会によって支えられている...そうしてほしいと願っています。

一 どうもありがとうございました。

インタビュー：柴尾智子（教育協力課課長）



中国のESD校

ハトとESDの文字をかたどったオブジェが置かれた中国のESD校。世界の学校がこのように恵まれたものだけではないことを私たちはよく知っている。

※ 写真は、ホプキンス氏の「EFA (万人のための教育) 達成のためのノンフォーマル教育政策・プログラム専門家会議」での発表資料より